



李為 ほか著

フランスの流通・都市・文化

中央経済社 2010



本書は、現代ヨーロッパとフランスの流通動向について分析したものである。本書の大きな特徴として、従来の経営学の枠組を超えて、その政策や意思決定の仕組みについても考察を巡らすと同時に、流通を取り巻く都市計画、交通、地方自治行政など幅広い分野からフランスの流通現状を説明し、その文化政策などの側面についても言及している。さらに本書はフランス研究者のみならず、現代フランスに関心を持っている方々にとっても、従来と異なる視点からフランスを眺める題材を提供している。

本書の研究対象として取り上げているフランスという存在は、これまでさまざまな視点から語られることが多い。とりわけ、日本では文化的な側面からのアプローチが多くの人々にも関心を寄せられているだろう。しかし他方で、現代フランスのスーパーマーケットや百貨店などの流通およびフランスの都市事情に対する知見は決して多くとは言えないが、皮相のレヴェルに留まっているのは実態である。フランス社会が持っている特徴は、その食やファッションブランドの側面だけに留まっていないことを、本書の行間から読み取れるだろう。筆者のフランス現地調査で明らかになったのは、フランス社会において古いものを大切にしながら、他方で大胆に新しいコンセプトを創出し、野心的な取り込みを実践している。特に都市流通という分野に限って見れば、都市を如何に自由に移動すればよいかについて、常に様々な工夫をしている。その考え方はフランスで生まれたものであるが、われわれアジアにも大きな影響を与えている。たとえば公共交通機関としてのトラム（トラムの詳細について、Groupement des Autorités Responsable de Transport (GART)を参照されたい）が、日本や中国などの地域でもその姿を確認することができる。すなわち、単に経済利益の重視だけではなく、今日の環境への配慮という人間中心の考え方によって、敷設されてきたものである。そこには、フランス社会におけるこれまで築いて

きた文化の役割が非常に大きかった。むしろ流通とは社会的に埋め込まれた慣習とか伝統すなわち文化によって規定されると言えるだろう。

こうした認識で、本書は専門的に考察したものとして、2006年から12名の執筆者がこれまでも研究会を積み重ねてきたなかから完成した研究の成果である。本書はフランスの流通と政策という空間軸に、都市・まちづくり・文化という時間軸をクロスさせながら全体を二部に分けて12章で構成されている。もちろん、それぞれの研究者の専門領域や問題関心が異なっているが、多次元的に議論している。

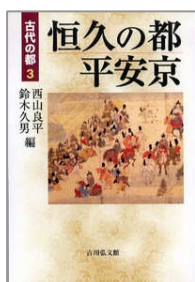
筆者が執筆した第12章では、フランスの文化政策を中心に、都市社会学の視点からパリでの調査事例を通して、フランスの文化政策に対して都市文化資本という説明概念を提起した。さらにフランス文化政策の問題点と課題として、特に初期の都市計画政策によって都心地域から周辺への持続的な拡張、それによってもたらされた構造的な不均衡といった問題が顕著であることを指摘した。このように社会学的なアプローチからも、流通にとって実に多面的で重層的であることを浮き彫りにすることによって、異なる視点からの考察が可能であることを示唆している。

(リ ウェー 経営学部教員)



カット 井手 慎吾

(経済学部 3年次生)



西山良平・鈴木久男 編

恒久の都 平安京



吉川弘文館 2010

本書は『古代の都』全3巻のうちの第3巻『恒久の都 平安京』として刊行された入門書です。

内容は長岡京・平安京の成立から院政期までの「都」を多面的に、13名の執筆者が論じています。

本書の構成は次のとおりです。

序章 恒久の都平安京 (西山 良平)

I 長岡京から平安京へ

- 1 遷都以前の山背 (高橋 潔)
- 2 長岡京 (梅本 康広)
- 3 平安遷都と平安宮の政務 (加藤 友康)
- 4 平安京の構造 (網 伸也)

コラム 平安京と「風水」(井上 満郎)

II 平安京の変貌

- 1 都の変貌 (山本 雅和)
- 2 都の民衆と災害・都市問題 (北村 優季)
- 3 院政期の京都と白河・鳥羽 (美川 圭)

III 都の諸相

- 1 平安京の邸宅と庭園 (鈴木 久男)
- 2 平安京と寺々 (堀 裕)
- 3 都の葬地 (山田 邦和)

コラム 貴族の器・庶民の器 (平尾 政幸)

以下、もう少しその内容を詳しく紹介します。

序章の「恒久の都平安京」(西山)は、長岡京・平安京の全体構造や平安京の住宅や町屋の成立などについて論じられています。

「遷都以前の山背」(高橋)は、山城盆地で発掘調査された旧石器時代から古墳時代までの遺跡・遺物を紹介しながら、各時代の様相が詳細に述べられています。

「長岡京」(梅本)は、長岡京の継続調査で蓄積された成果や最近の発掘調査から、長岡宮について自論が展開されています。

「平安遷都と平安宮の政務」(加藤)は、長岡京廃都から平安京遷都の動向、平安宮や京の造営、宮内政務について史料から述べられています。

「平安京の構造」(網)は、平安京の発掘調査成

果や史料から平安宮・京の構造や造営過程が述べられています。

コラム「平安京と「風水」」(井上)は、平安京の選地と風水との関係について述べられたものです。本学の講義で井上先生から直接お話を聞かれた方も多と思います。

「都の変貌」(山本)は、平安京の変貌や院政期における白河・鳥羽地域について簡潔に紹介されています。

「都の民衆と災害・都市問題」(北村)は、史料から平安京における洪水・疫病・火災などの災害について詳細に述べられています。

「院政期の京都と白河・鳥羽」(美川)は、院政期における平安宮・平安京・宇治・鳥羽離宮・白河・法住寺などの拠点についてその特徴を考察されています。

「平安京の邸宅と庭園」(鈴木)は、平安京内で確認された庭園を時期ごとに紹介し、その特徴を述べています。

「平安京と寺々」(堀)は、平安京内に官寺として造営された「東寺」「西寺」や京周辺部の寺院構造・歴史・変遷などが考察されています。

「都の葬地」(山田)は、平安京周辺部に営まれた葬地の特徴や被葬者などについて、図や写真などを随所にあげて詳しく述べられています。

コラム「貴族の器・庶民の器」(平尾)は、平安京の発掘調査によって出土した歴大な量の土器の分析から、当時の商品流通や使用していた人たちの生活状況が読み解けることを紹介しています。

なお、掲載されています図や写真のなかには、新発見のものや最近の研究結果が含まれています。

長岡京や平安京の最新情報を知りたい方や平安時代の文化などに興味のある方は、是非ご一読下さい。

(すずき ひさお 文化学部教員)



永田和宏・河野裕子 共著
京都うた紀行
近現代の歌枕を訪ねて



京都新聞出版センター 2010

本書は、京都滋賀の歌枕を訪ね、その場にまつわる思いや記憶を自由に書いたものである。歌枕というと古い名所旧跡といったものを連想するが、ここで取り上げるのはあくまで現代の歌枕。

別に特別な場所でもなくてもいいのである。ある場所が詠まれた歌（短歌）がある。そうすると普段通りすぎている場所がにわかには違った意味と魅力をもって立ちあがってくるのである。

きよみづ ぎをん さくらづきよ
清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みな
うつくしき 与謝野 晶子

じゆずやまち なかぎやう
しら珠の珠数屋町とはいづかたぞ中京こえ
て人に問はまし 山川 登美子

と言った近代の名歌は、清水や祇園、珠数屋町などの地名を忘れ難いものにしてくれるだろう。

階段を二段跳びして上がりゆく待ち合わせの
なき北大路駅 梅内 美華子

輪郭がまた痩せていた 水匂う出町柳に君が
立ちいる 永田 紅

これらの歌は、現代の若い女性の歌だが、北大路駅、出町柳などといった普通の場所も、次に通りかかった時、きっと微かに歌の記憶を呼び起こすはずである。そうして歌がちらっとでも記憶のアンテナにかかると、その何でもなし場所がにわかには特別な場所になる。歌を思い出さなくとも、ここを詠んだ歌があったなあとかすかに思うだけで、豊かな気分になるはずである。精神の豊かさとはそんな余裕からしか生まれない。

河野裕子は現代を代表する女性歌人であり、私の連れ合いである。本書に収められた五十の歌枕すべてを、河野裕子とともに訪ねたのだったが、この連

載が終わった直後にわたしは彼女を亡くすことになってしまった。本書に寄せる私の思いは「あとがき」に率直に述べているので、少し長いが引用させていただきます。

京都新聞社から『京都歌枕』の企画をいただき、気楽な気持ちでお引受けしたとき、連れ合いの河野裕子の乳癌が再発するとはまったく予想していなかった。手術後、すでに八年が経過しており、緊張していた家族の気分にもようやく明るさと余裕が生まれつつあった頃である。

初回の連載が紙上に載ると前後して転移・再発が告げられた。もとよりその時の本人、家族の気持ちを表現すべき言葉もないが、この連載の二年は、まさに河野が再発後の過酷な化学療法と向き合う二年間であった。そして何とか二年の連載を終わり、打ち上げの対談を終え、それが二度に亘って紙上に掲載されたその日から、一カ月も経たずして、河野は一人で旅立ってしまった。

よく頑張ったと思う。化学療法の副作用でほとんどものが食べられない状態でも、わたしと一緒に現場へ向かった。「わたしにとってこの連載で一番大きな意味は、あなたと一緒に時間を共有できたことだと思う」と河野自身が本書の対談のなかで言ってくれているが、その思いはもとよりわたしのものでもあった。

残り少ない二人の時間を刻むような思いで、いくつの場所を経巡ったことだろう。この人ともう二度とこの場所を踏むことはないだろうと思いつながら、その道中のおしゃべりを含めて、ここに書かれた場所たちは、わたしたちにとってまたかけがえのない大切な意味を持つ場所になった。

「あとがき」より
(ながた かずひろ 総合生命科学部教員)



坂東俊矢 ほか著

18歳から考える消費者と法

法律文化社 2010



だいたい法律なんて知らなくても生きていける。ただ、法律を知っていることが人生のピンチを助けてくれることがある。

そんな現世利益もさることながら、時に法律を学ぶことが、人の生き方のセンスにつながることもある。

『18歳から考える消費者と法』というこの本には、「考えてみること」がセンスある大人になるための確実な一歩になるとのメッセージが込められている。その素材は、消費者法や消費者問題。何よりも身近な法律問題だと思う。例えば、街を歩いているときに声をかけられてエステの契約をしてしまったのだけど、後で冷静になって考えてみると「やはり値段が高い。止めたい」と思ったら、どうしたらいいだろうか。キャッチセールスと言われるこの勧誘方法は、法的には訪問販売に該当して、8日間であればクーリング・オフができる。特定商取引法という法律を使えば、理由なしに契約を止められるのである。だから、クーリング・オフの期間やその行使方法などに関する知識はとても大切だと思う。でも、それにもまして、そもそも街を歩いている誰かに突然声をかけて契約をさせることは、やっぱり fair (公正) ではないということを知るセンスを身につけてほしい。「やっぱりおかしい」と思うことができるセンスのことを権利意識とも言う。おかしいと思って、それを社会的に適切な方法で主張できる。これが大人としての大切な能力であると私は思う。

もちろん、そのために知らないといけない知識がある。「市場」をしじょうと読む場合といちばと読む場合とでは何が違うのだろうか。クーリング・オフを主張するためには、誰にどのような方法で伝えればいいのか。『18歳から考える消費者と法』には、そんな生きていくための知識が分かりやすく、でも考える素材とともに詰まっている。

この本を書いたのは、私と、細川幸一日本女子大学教授のふたり。細川先生は、以前は国民生活センターという消費者問題を扱う国の機関に勤めてい

た。だから、どんな法律も経済理論も、現場感覚に基づいて書いたと自負している。

全部で20項目。1項目はだいたい4～6頁で構成されている。コラムや注釈も同じ頁に書かれているので、きっと読みやすいし、立体的に考えてもらえると思う。言うまでもないが、18歳という読者の年齢設定が、記述の水準を落とすことにはならない。分かりやすさと消費者問題と法の最前線とを徹底的に意識した。だから、法科大学院の院生や消費者法をすでに勉強した方々にも読んでいただけるものになっていると自負している。

(ばんどう としや 法務研究科教員)



カット 井手 慎吾

(経済学部 3年次生)